集団による音楽活動成立の条件
——あるバンドの結成から解散までをたどって——

野村　駿

本稿では、あるバンドの結成から解散までの軌跡を描き出すことで、集団による音楽活動成立の条件を明らかにする。先行研究では、ミュージシャン同士やミュージシャンと音楽産業との関係が論じられる一方で、バンドという活動形態の集団性については十分に検討されてこなかった。そこで、ある 1 つのバンドを対象とした調査結果から、個人の志向性を越えて、集団としての活動が成り立つ過程と、それが崩壊する過程を検討した。

明らかになった知見は次の 3 点である。第 1 に、バンドマンたちは個々の目標とは別にバンドとしての「共有目標」を決定することで、集団としての活動を可能にさせていた。第 2 に、「共有目標」の決定にはメンバー間の相互性が基底にあり、個々の目標をすり合わせる実践が見られた。しかし、第 3 に、相互性に依拠した共同性の確保は、前者の不調によって後者の解体を招き、その結果としてバンドは「解散」していた。

1　問題の所在

1–1　先行研究の検討——活動形態の集団性への着目

本稿の目的は、あるバンドの結成から解散までの軌跡を描き出すことで、集団による音楽活動成立の条件を明らかにすることである。

> A：何なんだろうね、バンドって。不思議だよね。あんだけ頑張ろうって言ってさ、みんな一丸となってやってきたつもりが 1 つひび入るともうさ、収拾つかないんだって。何かそれってさ、家族とも違うじゃん。メンバーって家族だなと思ってたけど、家族ではないな。結局他人なんだと思う。だからこそ理解せな、うん。

この語りは、本稿で取り上げるバンド X のリーダー、A さんがバンド X の解散に際して述べたものである。バンドを「家族」だと思って活動してきたが、結局は「他人」であり、だからこそ「理解」しなければならない。このように、集団で活動することの難しさと、共に活動するメンバーへの意味づけが語られている。

バンドという集団で活動するミュージシャン（以下、バンドマン）[1] たちは、一方で個別の考えや目標を持ちながら、他方でバンドという活動形態の集団性 [2] に拘束されている。ボーカルやギターなど各人の担当が決まっているうえに、バンドのメンバーシップも明確である。したがって、成員の代替可能性は極めて低く、相互の考えや目標を尊重して集団として活動しなければならない。本稿で検討するのは、こうして達成される集団的な音楽活動の実態であり、かつそれを可能にさせている条件である。

では、先行研究において音楽活動に伴う集団性はどのように論じられてきたのだろうか。ミュージシャンに関するポピュラー音楽研究を中心に、既存の研究成果を確認し、本稿の問いを明確にする。

まず、ミュージシャンおよびファンの共同体的側面に着目した研究がある。例えば、クラ

ブという「現場」を介して形成される人的ネットワークのあり様から、ラップ実践者の活動実態とラップ音楽文化のローカル化を論じた木本（2003）や、ライブハウスを拠点に戦略的に形成される同業者ネットワークの機能について論じた野村（2019）などは、いずれもミュージシャンたちが形成する集団に焦点を当てている。それに対し、ロックフェスが個人をつなぐコミュニケーションの結節点として機能していることを指摘した永井（2016）や、ライブアイドルを中心としたファン・コミュニティを〈ライブアイドル共同体〉として論じた竹田（2017）などは、ファンをはじめとする音楽の受け手＝オーディエンスの集団性を論じた研究である。さらに、音楽の作り手（ミュージシャン、パフォーマー）と受け手（ファン、オーディエンス）の相互関係に着目した研究も、集団として立ち現れる音楽活動空間の実態を捉えている（井手口 2004: 宮入 2008）。

以上の研究が、主としてミュージシャンおよびファンの集団性を論じているとすれば、次にあげる研究は、それ以外のアクターも交えてより大規模かつ組織的な集団について検討している。具体的には、レコード会社や音楽事務所、プロモーターやマネージャーといった音楽産業との関わりである（Negus 1996=2004; Toynbee 2000=2004; 平松 2017）。 Frith（1983=1991: 86）は、「ポピュラー・ミュージシャンは、自分たちの音楽活動をレコード会社やプロモーターに売ることで生計を立てている」と述べ、「彼らの生活を理解するためには、これらの経済関係から議論を始めなければならない」と主張する。これらの研究が描出しているのは、まさにミュージシャンとそれを取り巻くさまざまな他者・組織との協働的な実践であり、それによって音楽活動が可能になっている点である。

このように既存のポピュラー音楽研究では、ミュージシャンを中心とした集団的な活動の実態が明らかにされている。しかし、活動を共にする所属集団のメンバーによる影響については十分に検討されていない。つまり、ミュージシャン同士の関係性からさまざまな他者や組織との関係性まで、音楽活動に伴う多くの集団性が取り上げられる一方で、バンドという活動形態の集団性についてはほとんど明らかにされていないのである。

もちろんそれは、先行研究がバンドに限らない多様な音楽活動およびミュージシャンを対象としてきたからに他ならない。しかし、バンドを音楽活動において最も基底的かつ明確な役割分担のなされた最小の組織として位置づけるならば、その集団的な音楽活動の内実を明らかにすることには固有の意義があると考える。バンドが今なお音楽活動形態の 1 つとして重要な位置を占め、多くのミュージシャンの初期キャリアの一部になっている事実を踏まえるならば [3]、なおさらバンドという活動形態とその集団性に注視する必要があるだろう。本稿では、バンドマンの個別性をこえて、集団としての活動が可能になる条件を探ることから、上記の課題に答えたい。

1–2　分析の視点

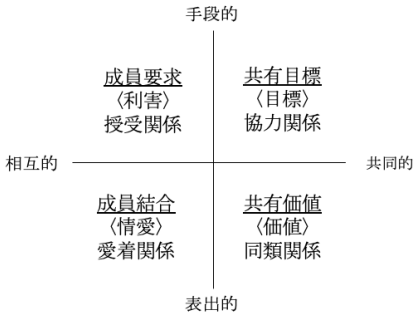
本稿で焦点を当てるのは、バンドという活動形態が持つ本来的な集団性である。それは、特定のバンドをこえたバンドマン同士の横のつながりによる共同体的な集団性とも、バンドマンでないアクターも含めて形成される組織的な集団性とも異なる。まさに、冒頭で A さんが語っていた「家族」とも他の何とも表現しがたいような存在がバンドメンバーであり、バ

ンドという集団なのである。

では、このことを踏まえたうえで、バンドの集団性はどのような視点から検討することができるだろうか。本稿では、吉田（1990）によって提起され、山田（2017）によって再構成された集団理論を用いて分析の視点を明確にする。 まず、山田（2017: 24-5）は、「およそあらゆる社会集団が共通に有している不思議な魔力」として「完璧な自由が味わえるわけではなく、それなりの拘束があり、だからこそ孤立した諸個人や諸関係の状態ではあり得ないような安定性と豊かさが得られる」ことをあげる。これをバンドの集団性にあてはめるならば次のようになろう。すなわち、バンドマンにとって所属するバンドは個々の自由を制限する拘束性を持つ。必ずしも自分のやりたい音楽が十全にできるわけではなく、他のメンバーとの相互交渉を経て活動方針が決まるからである。しかし、だからこそ享受できる達成感や楽しさもある。そもそもすべての楽器を 1 人で担当することは困難であるし、1 人では達成できない社会的成功を可能にしてくれもする。また、代替不可能なほどに明確な役割関係と成員性があるからこそ、安定して活動を続けることができる。バンドマンたちは、一方でバンドという集団に拘束されながら、他方でそれによって安定的に音楽活動を行っているのである。

そのうえで、次に問わなければならないのは、バンドマンたちがどのようにして集団としての音楽活動を可能にさせているかという点である。彼らは一方的にバンドの方針に従うわけではないし、バンドも常に安定しているとは限らない。まさに拘束されながらもなお安定して行われるバンド活動というのは、バンドマンたちのさまざまな実践によって成立していると考えられるのである。

ここで取り上げるのは、吉田（1990）による集団モデルである。山田（2017）はそれを「相互的―共同的」と「手段的―表出的」の 2 軸から整理した[4]。図 1 には 4 つの類型（下線）と成員を繋ぐ要素（山括弧）、関係性の特徴が示されている。以下、図 1 に基づいて本稿の分析枠組みを説明しよう。



出典：山田（2017: 47）より転載

図 1　吉田の集団モデル

まず、各類型の中身を確認する。「共有目標」とは、「共通の目標が主たる結節点となるような関係・集団」（山田 2017: 47）である。「成員の間で客観的ないし主観的に共有されている、〈集団の実現すべき未来の状態〉についての観念、と定義される」（吉田 1990: 50）。一方

「成員要求」は、成員が相互に〈利害〉を持つような関係・集団を指し、「各個人の目標、要求、統合、価値を意味している」（吉田 1990: 50）。また、「成員結合」は「主として人々が互いの人格を志向することによって成立する関係・集団を指しており」（山田 2017: 47-8）、〈情愛〉を軸に「他者を肯定して交渉を続けようとする態度」である（吉田 1990: 51）。最後に、「共有価値」は「成員の間で客観的ないし主観的に共有されている、〈望ましいもの〉についての観念である」（吉田 1990: 51）。

これらは、集団を弁別するホリスティックな類型であるが、単に特定の集団を振り分ける基準としてのみ用いるのでは不十分である。なぜなら、複数の類型にまたがって存在する集団や時を経て類型が変わる集団を捉え切れないからである。吉田（1990: 70）も、集団記述・分類としての「静態的構造分析」ではなく、集団の変化を捉える「動態的構造分析」を志向していた。

では、実際にこれらの類型を用いて「動態的構造分析」を展開するにはどのような枠組みが求められるだろうか。以下では、本稿の対象であるバンドに即して、それを述べていこう。

まず、バンドは「共有目標」による集団として位置づけられる。バンドマンたちは個々にそれぞれの志向性を有しているが、特定の目標を設定・共有することで集団としての活動を可能にさせているからである。問題は、それがいかにして可能になるのかという点である。つまり、〈目標〉の共有に至るプロセスから、集団による音楽活動を安定的に継続させる条件を探求するのである。

そして、本稿ではこれを他の類型―「成員要求」「成員結合」「共有価値」―を含めたモデルとして捉えていく。具体的には、各類型を独立するものと想定するのではなく、相互に関連するものとして位置づけることで、「共有目標」の決定による集団性の確保を論じるのである。

例えば、「共有目標」の決定には、それ以前の段階として「成員要求」や「成員結合」が組み込まれており、〈利害〉や〈情愛〉に基づく相互関係に依拠することで〈目標〉の共有もスムーズに達成されると考える。また、〈目標〉の共有には〈価値〉の共有が組み込まれることで、より十全に集団性を担保できるかもしれない。このように類型同士を関係的に捉えることで、「共有目標」の決定が次第に達成されていくプロセスを描き出すことが本稿の課題である。

このように本稿では、「共有目標」の決定過程を描き出すことで、集団での音楽活動が可能になる条件を探っていく。バンドマンそれぞれに異なっていた目標や価値がいかにして共有されていくのか、そこで彼らは相互にどのような要求をし、結合を見せるのか。バンドがメンバー同士の「要求」・「結合」を内に含みながら、特定の「価値」を伴って 1 つの「目標」を共有するに至る過程を検討することで、集団としての活動が可能になる条件を明らかにする。

なお、分析に先立って、本稿の特徴を 2 点述べておきたい。第 1 に、次節で詳述するように、本稿では結成から解散までの通時的なデータが得られたある 1 つのバンドを集中的に取り上げる。当該バンドのメンバー全員を対象としたデータセットからは、4 つの類型すべてに関わって、バンドの集団としての側面が変化していく過程が浮き彫りになる。この点で、

1 つのバンドに焦点化することには、積極的かつ重要な意義があると考える。第 2 に、本稿では、バンドの結成から解散までを射程に含めることで、集団としてのバンドが安定するとともに、その後大きく揺らぎ、最終的に消滅してしまうまでの過程を検討する。言うまでもなく、多少の変動こそあれ、常に存在し続けられる集団・組織は一部に過ぎない。本稿では、バンドの集団性が確保されていく過程を検討しながら、それと地続きの問題として、集団性が解除されていく過程を論じることで、集団による拘束性と安定性の拮抗が、時に集団を不安定化させ、その解消にまで至るプロセスを明らかにする。

2　調査の概要

本稿では、愛知県を拠点に活動するバンド X のメンバー 4 名（A さん、B さん、C さん、D さん）を対象としたインタビュー調査の結果をデータとして使用する。筆者は、2016 年 4 月から 2020 年 2 月まで、愛知県を中心に、「音楽で成功する」といった夢を掲げて活動するバンドマンを対象とした調査を行ってきた。バンド X のメンバーとは、B さんを通じて知り合い、解散した 2019 年の冬まで、彼らの出演するライブイベントのほとんどに参加し、活動状況を観察するとともに、節目ごとにそれぞれ 3〜4 回のインタビューを行った [5]。以下、バンド X の詳細を素描する。

まず、バンド X は、A さんが高校 3 年生のときに所属していた軽音楽部のメンバー 3 人で結成したものである（2011 年）。したがって、バンド X のリーダーは A さんが務めている。当時は、オリジナルの楽曲を作成したり、ライブハウスのイベントに出演したりといったことはなく、コピーバンドとして活動していた。

その後、大学進学にあたって、メンバーの 1 人が脱退したため、中学時代の同級生である B さんと他 1 名がメンバーに加わった（2012 年）。この 4 人体制になって初めて、オリジナル曲を制作するようになり、ライブハウスのイベントにも頻繁に出演するようになる。そして、大学卒業を控え、それぞれの進路を考え始めたときに、A さんと B さん以外の 2 人が就職する進路を選択し、脱退した。A さんは、B さんが「もうやめるか、しっかりやるかどっちかにしたいみたいなこと」を言ってきたことを契機として大学を中退し、B さんも就職活動を中断して、離学後は両者ともにフリーターとして活動するに至る。

その間、サポートメンバーを迎えながら活動を続け、2016 年の春にメンバーとして C さんと D さんが加わった。この 2 人は、バンドメンバーを募るサイトを介して A さんと B さんから連絡をし、オーディションを兼ねたセッションを経てメンバーに加わった。筆者がバンド X と関わるようになったのは、このタイミングである。以後、バンド X が解散した 2019 年の冬まで、観察調査とインタビュー調査を合わせて実施した。なお、調査の限界として、バンドの結成から C さんと D さんの加入までのデータは回顧的なものとなっている。メンバー間で語りの内容を照合し、齟齬がないかを確認したうえで使用することにする。

バンド X は、ライブハウスで活動するようになって、2016 年時点で約 4 年であり、ちょうど若手のバンドから中堅のバンドへと移行する時期にあった。そのことは、出演するイベントにおいても確認できる。当初は年齢・経験年数ともに上の先輩バンドばかりのイベントに

トップバッターとして出演していたが、次第に後輩バンドが現れるにつれ、トリを任されるようになった。また、バンドが企画するイベントにおいても、先輩バンド・後輩バンド問わず広く出演を打診されるようになり、いくつかのライブハウスを中心とした同業者ネットワークに埋め込まれていた[6]。2019 年には、出演するイベントのほとんどが、この同業者ネットワークを通じて打診されたものとなり、特に親しいバンドとは幾度かのライブイベントを企画している。

次に、集客力の面では、バンド X には固定ファンが 10 人ほどおり、ライブハウスのイベントでは 10〜20 人程度、自主企画ライブでは 40〜70 人程度の集客が可能であった。これらの数は、ライブハウスのチケットノルマとほとんど同数であり[7]、ライブスケジュールを計画的に組みさえすれば、赤字を出すことなく活動できる水準であった[8]。また、彼らは自らの音楽ジャンルを「ギターロック」として位置づけているが、広くロックミュージックであることを重視しており、楽曲のジャンルには多様性がみられる。

次節では、こうした特徴を持つバンド X を対象に、バンドとして 1 つの目標が共有されていく過程を描き出す。そして、その中に「成員要求」「成員結合」「共有価値」の側面が多分に組み込まれていることを指摘し、集団として音楽活動に取り組むことが可能になる条件を明らかにする[9]。

3　「共有目標」の決定と解釈実践——集団での音楽活動を可能にさせるもの

バンド X が「共有目標」を決定し、集団としての活動を可能にさせていく過程を論じるうえで、A さんと B さん、C さんと D さんという形で分けて検討する必要がある。なぜなら、前 2 者はバンド X 初期からのメンバーであるのに対し、後 2 者は途中加入のメンバーだからである。こうした時間軸に沿って、段階的に特定の目標がメンバー全員に共有されていくことを確認する。まず取り上げるのは、B さんの語った目標の中身である（以下、筆者の発言を*で、筆者補足を［］で、中略を……で示す）。

＊：B さんのバンド活動の最終的な目標みたいなのは、バイトのお金じゃなくて音楽の活動だけで生活できるように、

B：まあ、そうなりたいね。

＊：結構具体的なんやね。なんか、スーパースターになりたいとかではなく。

B：でもそういう想いもあるけどね。すごいバンドになっていい音楽をたくさん作っていきたいみたいな。そういうのもあるけど、それとは別で、リアルな生活のことを考えた目標でいえば、音楽、バンドでちゃんと生活ができるような。

＊：そのリアルじゃない目標ってどんな感じ？

B：まあ、有名になりたいとか（笑）。バンドででっかくなって売れたいとか。

B さんは、自分の「最終的な目標」を、「音楽、バンドでちゃんと生活ができる」ことだと語る[10]。もちろん、「すごいバンドになっていい音楽をたくさん作っていきたい」「有名になりたい」「バンドででっかくなって売れたい」といった目標も完全に捨て去るわけではない。

しかし、あくまでも「そことは別で、リアルな生活のことを考えた目標」として、先の目標が指摘されている。一方、A さんは次のように自身の目標を語った。

＊：「俺はバンドで食ってくんだ」っていつごろから考え出したの？

A：なんかねー、バンドで食ってくっていう感じではないのかな、俺は。なんかその、仕事にはしたい、当然。したいけど、バンドで食ってくぞっていうよりかは、ただ単純に今楽しいことをしたいっていう。やりたいことをやりたい。それしかないかな。それが仕事になれば最高だなっていう。

ここで A さんは、筆者からの「俺はバンドで食ってくんだ」という指摘に対し、「バンドで食ってくっていう感じではないのかな、俺は」と否定する。そして、「仕事にはしたい、当然」と断りながらも、「バンドで食ってくぞっていうよりかは、ただ単純に今楽しいことをしたい」と自分の目標について語っている。「やりたいことをやりたい」、「それが仕事になれば最高」というように、A さんの中では、「やりたいことをやりたい」という思いが「音楽を仕事にする」ことよりも優先して認識されているのである。

ここで着目すべきは、A さんと B さんが同じバンドで活動しているにもかかわらず、語られる目標の中身に違いが確認できる点である。より正確には、目指すべき方向性において、重視している事柄が異なっている。つまり、B さんは「音楽、バンドで生活できること」を重視しているのに対し、A さんは、「音楽を仕事にする」ことよりも、「やりたいことをやる」ことを優先している。

このように、同じバンドで、しかも一定年数共に活動してきた者たちであっても、目指している目標の中身には違いが見られる。そして、より重要なのは、その違いが、バンドとしての活動を困難にさせるほどには対立していない点である。むしろ、次の語りからわかるように、A さんは B さんの目標を理解したうえで、「やりたいことをやりたい」という自身の目標を語っている。

以下の語りは、大学卒業後の進路をめぐって当時のメンバーで話し合われた場面のものである。バンド X を続けるきっかけとなったのは、B さんの「もうやめるか、しっかりやるかどっちかにしたい」という発言であった。当時のメンバーは、大学卒業後の進路をめぐって二分しており、A さんと B さん以外はバンド X を脱退し、正規就職した。A さんにとって、こうした経験を共に乗り越えてきた B さんはとりわけ重要な存在である。だからこそ、「売れなきゃってのも。あいつはやっぱ売れることにこだわってるから、あいつとやるためにはって思うと」と、B さんと活動していくためには、「音楽で売れる」という目標を重視する必要があると述べている。それは、先に A さんが、「やりたいことをやりたい」という目標を優先させながら、同時に「それが仕事になれば最高だな」と、「音楽を仕事にする」ことを否定しなかった点とも符合する。

A：俺も、ちょうど就活するみたいな感じになって、バンドを解散するか、まあ就職しても続けられるペースに落とすかみたいな、どっちかみたいな感じになったんよ。で、一旦、ペースを落とす方に傾いて。で、俺もぼんやり就職しないといけないかなみたい

な感じになってたときに、B が「俺は嫌だ」みたいな。……もうやめるか、しっかりやるかどっちかにしたいみたいなことを言ってきたから、それで俺に火ついて、じゃあ大学辞めるって言って（笑）。……よっぽどやりたいんだろうなと思って。だから売れなきゃってのも。あいつはやっぱ売れることにこだわってるから、あいつとやるためにはって思うと。

このように見ていくならば、バンド X は、A さんが B さんの「音楽で売れる」という目標を受け入れることで「共有目標」化に成功しているといえる。しかも、それは次の語りに示されるように積極的な理由によって行われている。つまり、「バンドを続けたい」という A さんの目標を実現するためには「売れないと続けられない」。A さんにとっても「音楽で売れる」という目標を目指すことには重要な意味があるのである。

A：さっきの話だけど、その、バンドを続けたい[11]っていう俺の目標を叶えるためには、売れないと続けられないっていうのがあるわけだから、だから売れようと思ってるみたいな。……バンドを長くやるには売れなきゃキツイよねっていう。

先述の通り、A さんと B さんはバンド X の初期メンバーとして長らく活動を共にしてきた。よって、「共有目標」の決定は、その時間経過の中で徐々に成し遂げられていったものと考えられる。では、バンド X に途中から加入した C さんと D さんはどうか。彼らは、A さんと B さんによって共有された目標に対してどのように対応しているのだろうか。

目標の中身から明らかにしていこう。C さんは、次に示すように A さんや B さんと同じ「音楽で売れる」という目標を共有している。「普通にバイトせずに音楽やっていける人になりたい」という語りは、B さんの目標とも一致しており、目標の共有が達成されているといえる。

*：今後こうなりたいみたいなのある？

C：あー、普通にバイトせずに音楽やっていける人になりたい。もうめっちゃ売れて金持ちになりたいとは思わないんですけど、バイトやめれたらいいなって。

それに対し、他 3 人とは異なる目標を語ったのが D さんである。D さんが語るのは、「スタジオミュージシャン」、つまり「プロのバックで音出す人になりたい」というものである。D さんの目標は、ドラムというバンド X 内での彼の担当と関わっており、それゆえに他のメンバーとは共有されないものになっている。

D：目標があるんだよ。ソロで歌う人いるじゃん。そういう有名な人の後ろで演奏する人になりたい。スタジオミュージシャン。プロのバックで音出す人になりたい。

そして、D さんの「スタジオミュージシャンになりたい」という目標は、彼の活動スタイルにも反映されている。つまり、あくまでもドラマーという立場からの言明が増えるのである。

*：D さんとか、こんなドラムを愛して真面目な人だったんだって思った。

A：そうだよ。あの子はね、音楽を愛してるというよりはドラムを愛してるから。アーティスティックな感じ。機材もすごい大切にするし、

＊：［A さんは］音楽だよね？

A：俺は音楽かな。ほんと曲としてみたいな。

＊：揉めたりとかはないの？

A：そこはでもね、まあ、そういう話になると、D はやっぱドラムばっか聞いてきてんのよ。俺は曲全体として見てるから、視野の広さが違うわけよ。だから俺が全体のことを考えてドラムはこうしようかっていうと、いや、ドラムとしては、みたいな感じになっちゃうから、それは割とあるんだけど、まあでも最近は少なくなってきたかな。D がね、すごいバンドっていうものを意識し始めて、独りよがりをしなくなってきた感じがする。

ここで強調すべきは、他のメンバーとは異なる目標を語る D さんの活動の仕方に変化がみられることである。A さんは、「D がね、すごいバンドっていうものを意識し始めて、独りよがりをしなくなってきた感じがする」と述べている。別言すれば、A さんの要求を D さんが次第に満たすようになっていったのである。筆者はここに、D さんがバンド X のメンバーとして包摂されていく過程を読み取りたい。D さんの語りから検討しよう。

＊：バンド X 自体の目標って何？ バンド X をこうしていきたいみたいな。

D：なんだろ、メジャーデビューとか、そりゃもちろんあるけど、それよりは自分たちの自由が利く範囲で音楽をやること。メジャー行くと、今売れてる曲はこうだからこういう曲作ってねってのがあるから、それに従えるような俺を含め 4 人じゃないから、だったら自分らの自由が利く範囲で音楽を続ける。たぶんめっちゃ大雑把に言うと、続けるっていうのが 1 番の目標だと思う。

「スタジオミュージシャンになりたい」という目標を語った D さんも、決してバンドとしての目標を共有していないわけではない。むしろ「バンド X 自体の目標」として、「自分らの自由が利く範囲で音楽を続ける」ことを指摘している。この「音楽を続ける」という夢は、A さんの目標とも重なるうえに、他 3 人に共有されていた「音楽で売れる」という目標とも矛盾しない。つまり、D さんは、「スタジオミュージシャンになりたい」という目標とは別に、「音楽を続ける」という目標を共有することで、バンド X としての活動を可能にさせていたのである[12]。

そして、さらに重要なことは、D さんが単にバンド X の目標を共有するのみならず、個人の目標を追求するうえで、バンド X で活動することに意義を見出している点である。つまり、「スタジオミュージシャンになりたい」という目標を追求することが「バンド X を捨てる」ことになるわけではなく、むしろ「バンド X を続けても自分の好きな音楽ができる」可能性を指摘することで、バンド X を辞める必要性はないと語っているのである。そして、「未だに苦手なジャンル」だが「苦手だからこそやる意味がある」と捉え直すことで、バンド X で活動することに積極的な意義が見出されている。「むしろ自分個人の目標に近づくには、このバンドが 1 番いいんじゃないか」。こうした解釈実践を行うことで、「スタジオミュージ

シャンになりたい」という目標を保持したまま、「バンドを続ける」方途を見出し、集団での音楽活動を可能にしているのである。

＊：スタジオミュージシャンがやっぱりいいの？

D：そう、目標だけど、これ言うとバンド X を捨てるってなるから。でもなんだろ、バンド X を続けても自分の好きな音楽ができるって考えたら、それが 1 番。もしかしたら激しい音楽の人の後ろで叩けるかもしんないし。だからバンドとしても、全然辞めるつもりもない。……自分、未だに苦手なジャンルなんだよね。小さい音だし、シンプルが 1 番合うバンドなんだよね、バンド X が。俺はシンプルなのがあんまり好きじゃなかったから。けど苦手だからこそやる意味があるって色々考えたら、じゃあ辞める必要ないじゃんって。むしろ自分個人の目標に近づくには、このバンドが 1 番いいんじゃないかって。

以上、本節ではバンド X のメンバーによる「共有目標」の決定過程を検討した。A さんと B さんによって共有された目標が C さんと D さんにも共有されることで、バンド X は集団として活動することが可能になっていた。その際、B さんの目標を A さんが、バンド X の目標を D さんがそれぞれ理解し、自らの目標と齟齬のない形で意味づけることで、メンバー間での目標の不一致は回避されていた。

そして強調すべきは、以上の過程において「成員要求」や「成員結合」、「共有価値」の側面が複雑に組み込まれていた点である。例えば、A さんと B さんは、互いを手段的に欲するのみならず、共に活動してきたという経歴から人格的にも緊密に結びついていた。また、D さんは他のメンバーからの要求に応えるべく、活動スタイルを変更したり、「バンド X を捨てる」可能性を自ら否定したりしていた。このように互いを求め、認め合うような関係性が基盤となることで、「共有目標」の決定は可能になっていたのである。

一方、次の語りには、「成員要求」「成員結合」を欲する気持ちとその困難性が表れている。ここにも、メンバー間の相互性が基盤となってバンドの共同性が担保されていることが示されよう。

A：バンドはやっぱクリエイティブなことだから、当然自分がクリエイティブなことをするとさ、自分が認められたいっていう欲が付いてくるじゃん。だからこそっていうところもあるよね。その、4 人が全員、自分がやってることをメンバーにも認めてもらいたいとか。でも、出すものとしては 1 つにまとめないといけないから。それってめちゃくちゃ難しいじゃん。「4 人で 1 つの論文書け」みたいなもんだよね。

また、「共有目標」の決定には、「共有価値」も不可分に結びついている。次の B さんの語りには、第 1 に、共有されていたはずの「音楽で売れる」という目標をめぐって、メンバー間でその意味する内容に微妙な違いが存在していたこと、第 2 に、「共有目標」の決定に際して、「どのようなバンドになりたいか」という価値の共有も図られたことの 2 点が示されている。つまり、「音楽で売れる」という「共有目標」に、「どのようなバンドになりたいか」と

いう「共有価値」がピッタリと重なっているのである。そして、これら「共有目標」と「共有価値」の決定には、メンバー内での話し合いのエピソードが挿入されているように、やはりメンバー間の相互性が基盤になっているといえよう。

B：ポップになろうって決まった。

＊：ロックじゃなくて？

B：ロックはロックだけど、その中でもインディーズでしっぽりやろうっていう感じじゃなくて、オリコン食い込むような規模で聞かれるバンドになろうって。

＊：今まではそうじゃなったの？

B：今まではしっぽりちっちゃいところで、わかってくれる人にだけ見に来てもらおうみたいな。でもみんなばらばらだった。そういうところは。

＊：例えば？

B：C は、わりとそんな大きいところでやれるのかなあみたいな。 A はフラフラする。D はあんまり規模とかにはこだわんないかな。まあ、一応でかいところでやりたいとは言うけど普通にバンドが続けられればみたいな。俺はわりとでかいところ志向。

＊：それはいつ話し合ったの？

B：一昨日。一か月前ぐらいに話し合ったとき、一応まとまった感じではあったけど、一昨日話したらあんまりまとまってなくて、またちゃんと話そうって。

＊：どういう感じでまとまってないの？

B：C がどうなりたいって言われても何て言えばいいかわかんないみたいな感じで。まあ、俺が思ってることとか、A が思ってることを伝えてもあんまり賛同できないって。

＊：2 人はどういうこと言ったの？

B：もっとたくさんの人に聞かれるぐらいになろうよって。で、そんときに俺が「〇〇」（＝某有名バンド）って言っちゃって。「〇〇」ってなると、思いきりキラキラみたいな感じだから、そこが C は引っかかったみたいで。そうはなりたくないみたいな。それで、自分たちがいいって思える音楽性で、その大衆的なものをやっていこうって言ったら、C もそれだったらいいよってなって、まとまった。

以上から、バンドの集団性は、ひとまずは「共有目標」の決定によって担保され、安定するといえる。しかし同時に、その安定性はメンバー間の「成員要求」や「成員結合」によって達成されており、また「共有目標」には「共有価値」が伴っていた。冒頭の語りで、 A さんはバンド X を「家族」と表現していたが（ただし、それはバンド X の解散によって棄却される）、まさにバンドによる音楽活動の根底には、メンバー相互に求め、認め合う関係性が重要なものとして位置づいているのである。

そして、この事実に鑑みるとき、バンドの集団性は極めて脆弱な基盤の上に成り立っているといえる。つまり、「共有目標」の決定は、成員相互の〈利害〉や〈情愛〉に基づく関係性、さらには「共有価値」を伴って達成されており、そのいずれかに亀裂が入れば、すぐさまバンドの集団性にも揺らぎが生じてしまうのである。次節では、この揺らぎが実際に生じるこ

とで、バンド X が解散へと至った過程を検討する。

4　「共有目標」の破綻による集団性の解消 ——バンドの解散

前節の検討において、特に重要な位置を占めていたのは D さんである。彼は、他のメンバーには共有されない個人的な目標を掲げながら、それでもメンバーと手段的にも表出的にも結びつくことで、バンド X としての目標を共有し、集団としての活動を可能にさせていた。しかし、バンド X の解散は、この D さんを中心に突如として湧き起っていく。

> B：解散の話し合い自体は、そんなにしてなくて、ほんとに D の不満が爆発したときに、その後に俺と A が 2 人で会って、そのときにはお互い解散を決めてたみたいな。
>
> *：D さんが爆発したってのは、何があったの？
>
> B：元々 A と C が曲作りでぶつかることが多くて。で、スタジオで曲作ってるときにぶつかって、俺が止めに入って、もうちょっと時間をかけてもいいんじゃないみたいなことを言ったら、D が俺はもっと上に行きたいからそんなことで足踏みしてる暇はないみたいな。もっとみんな死ぬ気でやれよみたいなことを言ったって感じかな。

解散の引き金になったのは、D さんの「不満が爆発した」ことであった。具体的には、スタジオ練習の際に、たびたび衝突していた A さんと C さんを仲裁しようと、B さんが「もうちょっと時間をかけてもいいんじゃない」と発言したことに対して、「俺はもっと上に行きたいからそんなことで足踏みしてる暇はない」「もっとみんな死ぬ気でやれよ」と D さんが「爆発」したのである。このときのことを D さん自身は次のように語っている。

> D：多分解散の引き金引いたのは、俺。スタジオでブチギレたの。曲を作ってるときに、 C が「これはあんま弾きたくない」みたいなこと言ってて。前だったらイラッとしたけど、まあメンバーは尊重しなきゃと思って、「じゃあどういうのが弾きたい？」って言われたときに、「いや、今は」とか言って。なんか全然ダメやった。それにブチッと来て。……俺は曲作るときに、案を何個も持ってきてこれはどうって言える状態が一番楽ってずっと言ってたの。それができないってことは、なめとんなと思って。C にとは言わないけどメンバー全員に対して。旅行に行きたいとか酒飲みたいとか女と遊びたいとか、俺の邪魔になるようなことはもうしんといてってブチギレた。

曲作りに際し、代案を持ってこなかった C さんへの苛立ちが、この場面の発端になっている。特に着目したいのは、「俺の邪魔になるようなことはもうしんといて」という発言である。それは、先の B さんの語りの中でも示されており、D さんは「俺はもっと上に行きたいからそんなことで足踏みしてる暇はない」と言ったという。

この語りが重要なのは、それが前節で示した D さんの目標と大きく関わるからである。つまり、彼がバンド X で活動できていたのは、とりもなおさずそれが「スタジオミュージシャンになる」という彼自身の目標の実現につながると思えたからであった。「苦手だからこそやる意味がある」と意味づけ、「むしろ自分の個人の目標に近づくには、このバンドが 1 番いい

んじゃないか」と捉えることで、バンド X として活動することに積極的な意義を見出していたのである。

しかし、そうした解釈は、「俺は曲作るときに、案を何個も持ってきてこれはどうって言える状態が曲作りで一番楽ってずっと言って」きたにもかかわらず、それを実行しない C さんや、「旅行に行きたいとか酒飲みたいとか女と遊びたいとか」言うメンバーの存在によって維持できなくなった。つまり、「俺の邪魔になるようなことはもうしんといて」と、個人の目標を実現できる見込みがバンド X からは得られなくなったことで、このバンドで活動する意味までもが失われたのである。

この一件は、前節で検討したバンド X の集団性を担保する「共有目標」との関わりにおいて次のように説明できる。まず、D さんと他のメンバーとの「成員要求」および「成員結合」は著しく損なわれた。明確な言及があるものに限っても、助言を無視し続ける C さんや、「もうちょっと時間をかけてもいいんじゃない」と発言した B さんは、D さんにとって自らの要求を満たしてくれる者ではなくなり、「俺の邪魔になるようなこと」ばかりをするメンバーへの〈情愛〉も失われてしまったと考えられる。

そして、その結果として「音楽を続ける」という「共有目標」にも揺らぎが生じる。D さんは、「スタジオミュージシャンになる」という個人的な目標を実現するうえで、バンド X で活動することに意義を見出していた。しかし、この解釈を維持することは困難になった。つまり、このままバンド X で活動していても一向にスタジオミュージシャンにはなれそうにないと感受されることで、バンド X で「音楽を続ける」意味までもが失われてしまったのである。こうして D さんは、バンド X に留まる理由を無くし、「音楽を続ける」という「共有目標」からも離れていった。「共有目標」を紐帯としたバンド X の集団性は、それを維持するメンバーの離反によって、「解散」という形で終わりを迎えたのである。

だが、ここで 1 つ疑問が残る。確かに D さんの不満はバンドメンバー全員に向けられたものであったが、だとすればなおさら、D さんがバンド X を脱退すれば事足りるはずである。つまり、バンド X が解散する必然性はなかった。なぜバンド X は、D さんの「爆発」をきっかけとして、解散するにまで至ったのだろうか。それには、D さんの他に「共有目標」から降りようとした成員がいたことと関連している。

> A：［解散を］切り出したのは俺かな。今までにも、まあ、それぞれのメンバーから、「もう、ちょっと何か、やめたい」みたいなことを聞いてたんだけど、俺が引き留めてて。俺は解散っていう形には絶対したくなかったから。けど、どこかのスタジオでめちゃくちゃ爆発しちゃって、みんなの溜ってたものが。で、B と「もうやめよう」って。B は前から「2 人でやろう」って言ってくれてたから、「じゃあ 2 人でやるか」って言ったら、今度は B が折れちゃってて。折れたっていうか、もう疲弊してて。あいつが一番おちゃらけて、空気を和ませたりとか、疲れ果てて、燃え尽きて。俺が「じゃあ 2 人でやる？」って言ったときに、「そこに俺は要るのかな」みたいな。こいつも駄目やと思って。じゃあ、解散でって。

先述の通り、A さんと B さんはバンド X 初期からのメンバーであり、手段的にも表出的にも緊密に結びついていた。ゆえに、D さんの「爆発」の後、A さんは B さんと 2 人でバンドを続けるつもりでいた。A さん自身はバンド X を「解散っていう形には絶対したくなかったから」である。

しかし、当の B さんは「疲れ果てて、燃え尽きて」いた。「俺が、『じゃあ 2 人でやる？』って言ったときに、『そこに俺は要るのかな』」というように、バンドを続けることに消極的だったのである。実際、バンド X 解散後にも、A さんが別のバンドを結成しようと B さんを誘った際、B さんはそれを断っている。「もっとガツガツやっていきたいと思って」いる A さんに対し、「そこに俺はついていくことは厳しいと思っとるから」である。

> B：みんな名残とかはなく、そうやね。
>
> *：あ、名残ないの？
>
> B：んー、あるかないかで言われたら難しいところやけど、どうやろ。でも結構もうやれることはやった感じがあるし。その、最初はほんとできんかったけど、今では夢のような時間とか、自分たちが満足いくライブが作れるようになったっていうのもあって、その、後悔とかはもうないのかな。どっちかっていうとやり切ったでしょみたいなのがあるかな。……A はもう 1 個バンドを作ろうとしとる。で、そこにも一応やらんの？ みたいなのを言われはしたけど、A としてももっとガツガツやっていきたいと思ってて、そこに俺はついていくことは厳しいと思っとるから、俺はいいわって。

バンド X を解散させることに「後悔とかはもうない」。それは、「どっちかっていうとやり切ったでしょみたいなのがある」からである。B さんは「音楽で売れる」ことを目標にしてこれまで活動してきたが、すでにその目標は目標ではなくなっていた。D さんの「爆発」は、共同的に達成されていた「共有目標」の綻びを顕在化させ、またそれが決定因となって、バンド X の集団性を解散という形で解消させたのである。

5　まとめと考察

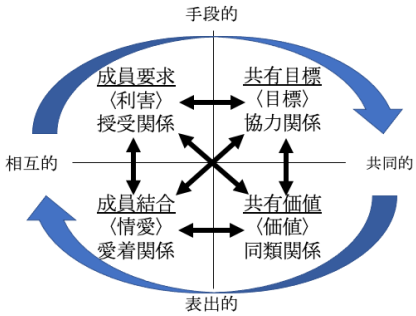
本稿では、バンド X の結成から解散までをたどることで、集団としての音楽活動が可能になる条件を検討した。明らかになったのは、メンバー間の相互性に基づいてバンドの共同性が担保される様相である。つまり、「成員要求」「成員結合」を通して、「共有価値」を伴いながら「共有目標」が決定されることで、集団としての音楽活動は可能になっていた。ただし、この集団性は、成員同士の相互性に依拠しているために非常に脆いものでもある。ゆえに、相互性の破綻が共同性の崩壊を招くという、バンド活動の不安定性が明らかとなった。バンド X が経験したのも、当初保たれていた成員同士の相互性に亀裂が入ることで、そのまま「共有目標」の維持に困難が生じ、バンドとしての集団性が解散という形で解消されていく過程であった。

以上の知見は、これまでの研究に対して次の 2 点で意義を持つ。第 1 に、ミュージシャンを対象としたポピュラー音楽研究に対して、何よりもまず、バンドという活動集団独自の力学

を提示できた。先行研究では、ミュージシャン同士の関係性や、ミュージシャンと音楽産業との関係性が取り上げられる一方で、ミクロな個人とマクロな社会との間にあって、ミュージシャンを拘束しつつも安定的な活動基盤を与えるバンドという集団そのものについては十分に論じてこなかった。平松（2017）や野村（2019）では、バンド仲間やさまざまな組織のアクターとの関係性が強調されていたが、それ以前に彼らは所属するバンドに深く埋め込まれている。したがって、バンド仲間や組織との関係性以上に、共に活動するメンバーから重要な影響を受けている。本稿で明らかになったのは、まさに単独で活動していないがゆえに、他のメンバーの存在に影響されながら「共有目標」が決定され、集団としての活動が可能になっていく過程であり、バンドという集団的な音楽活動の存立構造に他ならない。そこに準拠することで初めて、所属するバンドを越えた他者・組織との関係性が形成できるようになる。本稿の知見は、バンドという限定的かつ特定の音楽活動形態を対象にしているものの、しかしそれゆえにこそ、バンドを越えて展開される関係性の準拠点として重要な、活動集団の力学を明らかにした点で意義があると考える。

第 2 に、バンドの集団性を検討するべく、集団論・組織論の枠組みを明示的に援用した点である。既存のポピュラー音楽研究では、何らかの集団性が捉えられこそすれ、それは個々の関心に応じて分析されるために、例えば「成員結合」のみ、「共有価値」のみといった形で限定されていた。それに対して本稿では、ホリスティックな集団類型に基づくことで、バンドという 1 つの集団の多様な側面を浮かび上がらせることに成功したといえる。

またそれは、既存の集団モデルを図 2 のように修正する。つまり、各類型を越える「動態的構造分析」を志向した結果として、集団類型相互の関係性から「共有目標」の決定に至るプロセスを明らかにした。「共有目標」の決定には、「成員要求」や「成員結合」が内包されており、かつ「共有価値」も伴っているという本稿の知見からは、各類型は完全に独立しているのではなく、相互に関係しあうことで、集団の生成・維持に結びついていると考えられる。



出典：山田（2017: 47）をもとに筆者作成

図 2　集団類型の循環モデル

そしてそれは、相互性と共同性の循環モデルとして再構成できよう。つまり、成員同士の相互性が集団の共同性を支えるとともに、一度確立された共同性が再び成員同士の相互性を規定することで、様相を変えながらも特定の集団が維持されるという循環的なプロセスである。

さらに、この構造は成員同士の相互性に依拠しているために、その揺らぎによって自ずと集団の共同性にも影響が及ぶという不確実なものである。本稿の知見が示すのは、集団の安定性を確保するために、メンバー同士で互いの目標を尊重しながら「共有目標」が決定される一方で、相互性の不調によって一挙に共同性までもが解体していく過程である。相互性と共同性の循環構造の中で、集団を安定させる相互性の中身と、にもかかわらず集団性が解消される過程とを、具体的事例を通して明らかにした点で、本稿の知見には重要な意義があると考える。

最後に、今後の課題を 2 点述べたい。第 1 に、本稿の知見は、あくまでもバンド X という限られた事例から得られたものである。言うまでもなくバンドが解散する理由は無数に存在するし、集団性の現れ方も異なるだろう。他のバンドも含めた比較分析を通して、知見の精緻化を図る必要がある。第 2 に、バンドという集団が他の集団・組織とどのような関係にあるのかを詳細に捉えた分析が求められる。バンドマン個人とバンドの集団性との相互規定関係を本稿では示したが、その影響関係は他の集団や組織との共時性の中で捉え直さなければならない。今後調査を継続する中で、改めて検討したい。

付記

本稿は、JSPS 科研費（課題番号：19J15481）の助成を受けたものである。

注

1 以下では、バンドという形態で活動する者を特に指す場合には「バンドマン」という呼称を用い、それ以外にはより広範な対象を指し示す「ミュージシャン」を用いる。なお、先行研究に言及する場合は，当該研究において用いられている呼称をそのまま使用した。

2 山田（2017: 1）は、「集団」を「一定の境界によって区切られた人々と彼らが繰り広げる相互行為や関係から成り立つ独特の意味空間」と定義する。本稿では、バンドという一定の境界を有した「集団」を対象に、その成員によって行われる相互行為や意味付与に着目することで、バンドの「集団」としての側面が維持・解消されていく過程を検討する。

3 ロックミュージックを始めとする若者文化は、従来学校文化や生徒文化とは相容れないものとされ、主として学校外部で享受されてきた。しかし、1990 年代以降の教育改革を背景に、学校内部への浸潤が確認できる。大多和（2014）は、それを学校教育の進路保障機能の弛緩と関連づけて論じている。同時に、バンドに限れば、これまでにも若者たちが音楽活動を開始させる重要な契機として軽音楽部などがあり（小泉 2003）、ミュージシャンとしてのキャリアのスタートにも位置づけられる（Nomura 2021）。

4 「相互的―共同的」は、「関係や集団の元となる志向が異なる対象に向かっているか同一の対象に向かっているかの違いを指して」おり、「手段的―表出的」は、前者が「何らかの目的を達成するための手段として関係や集団が構成されているという意味であり」、後者は「当の関係や集団それ自体が大切なものとして捉えられているということである」（山田 2017: 46-7）。なお、吉田（1990: 28）では、それぞれ「連鎖的―集合的」、「遂行的―属性的」と表現されている。

5 いずれも 20 代前半の男性であり、D さんを除く 3 名は高卒後進路として大学を選択した。また、離学後は 4 名ともフリーターになっている。なお、A さんがボーカル、B さんがベース、C さんがギター、D さんがドラムである。加えて、バンド X は男性のみで構成されているが、筆者の調査全体では女性バンドマンにもインタビューを行っている点は記しておきたい。

6 これらの経歴は、バンド X に固有のものというよりも、広くあらゆるバンドに確認できるものであ

る。野村（2019）を参照。

7 バンド X が主に活動していたライブハウスは、100〜250 人定員の小規模ライブハウスである。そのため、ライブハウスのチケットノルマは、複数のバンドが出演するイベントの際には、一バンドあたりおおよそ 10〜20 枚であった。

8 筆者の観察範囲では、この集客力は他のバンドと比べても、平均もしくは平均を少し上回る程度である。それは、注 7 で記した活動拠点としてのライブハウスのキャパシティとも大きく関連しているが、いずれにしても、集客の面で活動を続けられないほどに困窮していたわけでも、また逆にそれのみで生計を立てられるほどでもない。

9 個人およびバンドの特定を避けるため、インタビューの日時を明記することは控えたい。ただし、3 節では解散以前に採取したデータを、4 節では解散決定後に採取したデータを用いている。

10 ここで、B さんが「音楽、バンドでちゃんと生活ができる」と語っていることに注目したい。つまり、「音楽」が「バンド」と言い換えられているように、彼の中で「音楽で売れる」ことはそのまま「バンドで売れる」ことを意味している。このことは他のメンバーにも概ね当てはまっており、本稿では原則として語られた目標そのものを記載しているが、「音楽」と「バンド」がほとんど代替可能なものとして捉えられている点には留意されたい。

11 A さんの目標が「やりたいことをやる」から「バンドを続ける」に変化しているが、彼にとってのやりたいことはそのままバンドを指すため、両者を同じものとして理解する。

12 「音楽で売れる」という目標と、「音楽を続ける」という目標は密接に関連している。なぜなら、A さんも語るように、音楽を続けなければ売れることはできず、また売れなければ続けることもできないからである。本稿では、これらの相違性ではなく、その関連性に着目して、どちらもバンド X の「共有目標」であると位置づける。

文献

Frith, S., 1983, *Sound Effects: Youth, leisure, and the politics of rock'n'roll*, London, Constable（細川周平・竹田賢一訳, 1991, 『サウンドの力——若者・余暇・ロックの社会学』晶文社）.

平松絹子, 2017, 「グローバル時代のインディー・ミュージック——アンダーグラウンド音楽文化のエスノグラフィーからみるアーティスト活動の実態」毛利嘉孝編『アフターミュージッキング——実践する音楽』東京藝術大学出版会, 249-78.

井手口彰典, 2004, 「『非–芸人』としてのストリートミュージシャン ——『他者』の機能を中心に」『ポピュラー音楽研究』8: 3-16.

木本玲一, 2003, 「日本におけるラップ実践と人的ネットワーク ——二つのグループの実践を事例として」『ポピュラー音楽研究』7: 3-14.

小泉恭子, 2003, 「ポピュラー・ミュージック・イン・スクール」東谷護編『ポピュラー音楽へのまなざし——売る・読む・楽しむ』勁草書房, 256-79.

宮入恭平, 2008, 『ライブハウス文化論』青弓社.

永井純一, 2016, 『ロックフェスの社会学——個人化社会における祝祭をめぐって』ミネルヴァ書房.

Negus, K., 1996, *Popular Music in Theory*, Polly Press（安田昌弘訳, 2004, 『ポピュラー音楽理論入門』水声社）.

野村駿, 2019, 「不完全な職業達成過程と労働問題——バンドマンの音楽活動にみるネットワーク形成のパラドクス」『労働社会学研究』20: 1-23.

Nomura, H., 2021, “Places of Belonging (Ibasho) and Pursuing One’s Dream; The Unstable State of Transition Driven by Youth Culture,” *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, No.15: 57-68.

大多和直樹, 2014, 『高校生文化の社会学——生徒と学校の関係はどう変容したか』有信堂高文社.

竹田恵子, 2017,「ライブアイドル、共同体、ファン文化——アイドルの労働とファン・コミュニティ」田中東子・山本敦久・安藤丈将編『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』ナカニシヤ出版, 117-33.

Toynbee, J., 2000, *Making Popular Music; Musicians, Creativity and Institutions*, London: Arnold（安田昌弘訳, 2004, 『ポピュラー音楽をつくる——ミュージシャン・創造性・制度』みすず書房）.

山田真茂留, 2017, 『集団と組織の社会学——集合的アイデンティティのダイナミクス』世界思想社.

吉田民人, 1990, 『情報と自己組織性の理論』東京大学出版会.

（のむら　はやお、秋田大学、ha8ya0@gmail.com）

（査読者　富永京子、高橋かおり）

Conditions for Performing Music Activities in a Group:

Following the Formation and Dissolution of a Band

NOMURA, Hayao

This study identified the conditions and difficulties of establishing music activities as a group by drawing a trajectory from the formation of a band to its dissolution. The musicians shared not only their personal objectives but also the goal of the band because they worked in groups. Furthermore, the interaction between members enabled them to work on music activities as a group. However, because it relied on interaction, group music activity was fragile and its collapse led to the dissolution of the band.